出藍文庫

3-1

「I love you」の訳し方

近藤　貴弥　編

出藍文庫

目次

月の明るい夜に……五
来年の思い出……二九
63円の縁……五五
冬と春……七九
後書き……一〇二

月の明るい夜に

村松隆と斉藤ゆきは同じマンションで一人暮らしをしている隣人同士である。同じ大学の文学部に通う学生でもあり、同じサークルの文芸部に所属している。ただ専攻しているものが異なり、村松はフランス文学を、斉藤はロシア文学を学んでいる。

共通点が多い二人であるが友達と呼べるような関係でなければ、勿論、恋人同士でもない。村松も斉藤も過去に恋人はいたが今は共に独り。村松と斉藤の友達は二人がフリーであることを知っているが、村松と斉藤は互いのそんなことまでは知らない。

双方が双方について知っていることは多くない。

同じサークルに所属していることもあり顔を合わせる機会はあるが親しく話すことはない。斉藤は律儀にサークル活動を行っているが、村松はサークル活動よりも日々の講義や研究について日々を費やしており、サークルに顔を出す機会が多くないためである。

顔馴染み、という関係性が適切といえる。そんな関係が一年、二年と続き、三年目になろうとしている。一コマ目の講義が重なった時に、玄関で挨拶をする程度の関係。大学を卒業するまでそんな関係のままだろうと村松も斉藤も考えている。

多くの大学生は一年、二年と在籍期間が増えると上手くサボるようになる。卒業に必要な単位だけを得ようとするのだ。そうすると、上手く一コマ目を空けるようになったりする。

村松は意図的に一コマ目を空けないよう単位を取得しようと組んでいる。朝を制する者が一日を制する、果ては人生を制すると考える性質だったので。

斉藤はそういう性質を有しておらず、多くの大学生の内の一人であったため、一コマ目に講義がある時にだけ村松と顔を合わせる。

「おはよう」

「……おはようございます」

村松は朝から普段と変わらない人間であったが、斉藤は朝に弱く、普段と変わらない村松の声に、微かに眉を曇らせることもある。可能であれば無視をしたかったが、一年二年と隣人であると、そう無碍に扱えないものが生じてしまった。しかも、同じ大学で学部も同じであり、サークルも同じであるとなると、難しい。

ただ斉藤の方から、そんなふうに挨拶をしなくてもよくありませんか、会釈とか黙礼程度

で良いじゃないですか、と言うことはない。朝、大学の門を潜るまでは誰とも接したくなく、話したくない。斉藤ゆきが斉藤ゆきとして振る舞えるようになるのは、村松より時間がかかる。

扱いの難しさを覚えているのは斉藤だけであり、村松は玄関の鍵をかける斉藤の横顔に挨拶をする度に、頭の中に、はじめて出会った時の印象そのまま、氷を思い浮かべる。

その氷の印象は、斉藤の名前が冬の時にだけ見える自然現象から連想されたからではなく、指や頬が白いからでもなく、素っ気なさそうな声音や態度からでもなく、誰にでも敬語で接して明確に意図的に他人と距離を取っているからでもない。

サークルの飲み会で彼女と再会した時、村松は自分が度々見かけていた隣人に見えなかった。講義のどこかで見かけたような大学生にも見えなかった。他のサークルメンバーの熱気や居酒屋の暖房や照明で、氷が水へと変化してしまったような、そんな印象を持った。その印象が現在まで続いているのだ。

村松はそんな印象を懐いた斉藤のことを悪く思っていない。飲み会に参加しているのかどうか分からないように長い席の端から動かない。大きな声を上げたりすることもない。楽し

んでいるのかどうか、ということすらも分からなかったが。兎角、飲み会で迷惑になっていない斉藤を悪いとは思っていない。斉藤もまた、時々飲み会に顔を出す村松のことを悪く思ってなかった。

斉藤はあまりサークル飲み会に出席していないが、村松は斉藤よりも出席していなかった。サークル活動に精を出している様子も見受けられないし、メンバーと仲良くしようという気配も見受けられない。その態度はどうなのかと思うが、村松に言えたことはない。

村松のサークルでの態度を思う度に、しかし、と擁護の声を思い出す。サークル活動の一環として小説や評論や詩歌を集める時、村松は誰よりも早く、良いものを用意する。そういうところでバランスが取れる村松を、斉藤は快く思っていない節がある。

村松がサークルの飲み会にほぼ参加していないのはれっきとした理由がある。村松は下戸なのだ。烏龍茶やジンジャエールぐらいしか飲めない。ソフトドリンクに飽きると、他の者が酒を飲むように煙草を吸う。一本、二本というものではなく、かなりの頻度で。

飲み会に顔を出すと酔っ払った幹事から代わりを任命されることが度々ある。素面という

理由だけで。会計のことや勝手に開催される二次会と帰る面々とを引き離したりするそんな役目。

村松はそういう役目を引き受けるのが良く思っていない。気持ち良くアルコールに全身を浸し、顔を赤くして大声で話したり、笑い声を上げてみたかった。しかし、下戸である村松にそのようなことは難しく、損な役目を引き受ける。

この損な役目を引き受けると、お礼で煙草を貰えるのは助かっているため、中々に断りにくい。

斉藤はそういう困り顔の村松を見かけると精々するのだが、飲み会がいつまでも終わらないのは困る。それはそれ、これはこれという意識が働き、幹事の代わりを引き受けた村松の手助けする。

「こういうことは一人よりも二人の方が早く終わります」

淡々とした斉藤の声からアルコールの臭いはしない。斉藤は一度、サークルの新人歓迎会の時に他の者と同じように酒を飲んだことがあるのだが、一杯目の途中で顔が真っ赤になり、

以降は飲ませてもらっていない。斉藤としては飲みたいのだが、周りが止めるのである。斉藤は顔はすぐに赤くなるが酒には強いタイプなのである。

二次会へと赴く者を見送り、村松と斉藤は帰路に着く。サークルのこと講義のこと研究所の見学のこと……多くのことを話せる二人だったが、終始無言を貫く。

同じ電車に乗っても、同じ駅で降りても、同じ夜道を歩いても、二人が言葉を交わすことはない。一定の距離を保っている。斉藤の履くヒールの音だけが広がる。

村松は明日の講義や研究のことを考えていた。村松はもし斉藤が同じ専攻であれば今後のことを話そうと思っていたが、彼女は彼女なりに考えているのだろうと思っていた。

斉藤は酒を飲みたいと思っていた。飲めるのに飲めないように扱われるのは嫌だった。家に帰ってから飲み直そうかなどと考えている。村松が下戸でなければいいのに、と思ったのは一度や二度ではない。煙草を吸うように酒を飲んでくれれば、他の者と同じように二次会に雪崩こめるのだが……。

そうして、玄関の前で挨拶を交わして、別れた。

ある冬の夜、村松は久し振りにサークルの飲み会に顔を出していた。サークル長の送別会ということもあり、流石に顔を出さないのはまずい。繁華街のとある居酒屋には既に多くの参加者がおり、斉藤の姿もある。村松が見かけた時、斉藤の頬はやはり雪のように白かった。酒は周りが止めているのだろう、と村松は煙草を片手に見ていた。

一軒目の飲み会が終わるとサークル長は何人ものメンバーを連れ添って、二軒目へと動き始めた。本来幹事として場を取り仕切っていた者はとうの昔に酔っ払っており、村松の前には誰からか分からない煙草やソフトドリンクや伝票などが置かれた。

二次会へ参加しない者達は各々帰路へと着くのを見届ける。村松は多くの者を見送ると、駅の喫煙所で一息つく。まだ夜が更けていない、全然終電を使う必要がない時間帯。

澄んだ夜空には満月がかかっており、白い息と細い煙が昇る。

一服を終えて村松も帰路に着こうと動き出した時、改札の前に見慣れた姿があった。柱にもたれる女が一人。

白いコートに身を包む斉藤。赤いマフラーに埋めるように顔を覆っている。頬が赤く見えるのは、きっとマフラーの色味のせいだろうと村松は思うことにした。

斉藤はサークル長に勧められて、生ビールを飲んだ。ビールはアルコール度数が低いので一杯だけならば大丈夫だろうという言葉を信じて。久し振りの飲み会の酒。斉藤は随分と朗らかな、ある種の多福感ともいえる気持ちで胸を一杯にしたサークル長の送迎会を楽しんだ。

斉藤は酒を飲むとすぐに表情に出るが二日酔いになったり、飲み会の途中で嘔吐したりという所謂、酒の失敗はない。人よりも早く気持ち良く酔うのが早く、そこでセーブできる。高揚感が続くだけの楽しい感覚が続く。

二次会への参加したかったが、周りが余りにも止めるので帰るのを余儀なくされた。が、斉藤はこのまま帰るのは勿体ないような気がしたのだ。帰ってしまえば、後は眠り、また朝を迎え、村松と顔を合わせることになるだけだ。そういうのは避けたい。まだ夜は長く、帰れる手段も残っている。周りには幹事になってしまった村松と確認したいことがあると言って、駅前で彼を待つ。確認したいことは何もなかったが。

村松は幹事に変わってしまった立場として、忘れ物があったかどうか思い返してみたが、忘れ物はない。ならばどうして斉藤はここにいるのであろうか。斉藤が乗るべき電車は少し前に駅を発車している。次の電車まで少し時間がある。改札を通って、待っておけばいいのではないか。

村松には斉藤が何故、ここに居るのか分からなかった。まるで村松を待っていたかのように、そこにいる斉藤のことが分からなかった。

分からないというのは語弊がある。村松は斉藤が酒に酔っていて帰れない可能性を考えたくなかった。代理の幹事としての務めもある一方で、斉藤が酔っ払うとどういう人間に変わるのか知りたくなかったから。

「何か忘れ物でもあった?」

表面上は穏やかに声をかけ、斉藤に近づく。斉藤の足取りは普段と変わらないものだったが、その声からは微かにアルコールの臭いが感じ取れる。

村松の顔が固くなったを見て、斉藤は楽しげに白状する。マフラーの中に埋まった赤い唇

が弧を描く。
「サークル長からお許しが出ましたので」
村松の口がぐっと曲がったかと思えば、堪えるように強く閉ざされた。何がとか何故とかそういう質問はない。その一言で斉藤の今の状態を説明するのは十分だった。ただこのままではサークル長が悪者になってしまう誤解を生みそうだったので、
「別にサークル長から飲めと言われて飲んだわけではありませんよ。私が自ら飲みたかったので飲んだだけです」
と斉藤は付け加えた。
村松は何をどう言えばいいのか分からなかった。飲み会で酔う者は何人も見ている。駅で別れることもあれば、家の最寄りまで送ることもあれば、家まで送ることもある。村松がそういうふうなことをするのはいずれも同性の友達であり、異性の場合は異性に任せている。
「少し、歩こうか」
村松は問い掛けるように語尾を上げることなく、自分に言い聞かせるように時間を稼ぐ手

段に出た。長い夜が、斉藤を素面に戻してくれるだろうと信じていた。冷たい夜風が、斉藤の火照った頬を元の色に戻してくれるだろうと信じた。

居酒屋ばかりが立ち並ぶ通りにコンビニがあったことを村松は覚えている。水でも何でも買って、落ち着かせようと思った。斉藤が行儀良く水を飲むか分からなかったこともあり、その案は採用しなかった。何よりも村松は落ち着く時間を欲した。

斉藤の答えは聞かずに村松は背を向けて歩き出す。斉藤の低いヒールの音が、後ろからついてくる。村松は普段よりもゆっくりと歩いていたこと、斉藤の足取りが先程と比べて大きくなったことがあり、二人は並んで歩くことになった。二人のマンションへ帰る駅とは違う方向だったが。

「どちらへ？」

斉藤が訊いても村松は答えなかった。答えを探しているかのように周りを見渡している。何か明確な目的がある行為ではないことは分かる。斉藤からしてみれば、村松の方が酒に酔っているように見えた。村松が下戸だということは聞いているが、居酒屋の雰囲気だけで酔う

とまでは聞かされていなかった。

繁華街に並ぶ居酒屋はどこも明るく、店の前にいる店員に声をかけられる。二件目はいかがですか、と。斉藤は二件目に行きたかったが、下戸である村松に付き合わせるのは失礼であろうという良識は持ち合わせていた。もう帰るところなんです、と愛想良く断り、隣を歩く村松を見上げる。村松の困惑したような、当惑したような表情の遥か向こうに満月も見える。綺麗な月であった。

居酒屋が多く立ち並ぶ通りの中にはカフェもあった。ラストオーダーが終わったり、煙草の吸えないカフェが。そうやって何件かの居酒屋やカフェを通り過ぎて、あるビルの地下にまだ営業しているカフェを見つけた。煙草も吸えるカフェを。

村松は斉藤に何も言わずに階段を降りる。斉藤は呆れ返って何も言わずに階段を降りた。

カフェは真夜中のように静かだった。向かい合って座るソファが何脚か置いてあるだけの小さな店内。

斉藤はコートを脇に置き、マフラーをその上に重ねる。村松の思っていた通り、赤く染まっ

た頬が細い照明に照らされる。寒さのせい、と思い込むのはもう難しかった。

村松と斉藤は互いが互いのことを酔っていると思っているので、ミルク珈琲を二つ頼んだ。サークル長が酔った時にこれを飲めば何とかなると口癖のように言っているのを覚えていたから。

村松は慣れた動作で灰皿を受け取り、煙草を取り出し、火を点けようとして斉藤を一瞥した。

「吸っても？」

飲み会で散々吸っていて、服に煙草の臭いがついている男にそんなことを確かめられてると思っておらず、斉藤は嫌味を口にする。

「もし嫌ですって言ったら、吸わないんですか？」

「飲み会とカフェは違う」

「お好きにどうぞ」

短い会話だったが、斉藤の声は普段と変わらないように人と距離を保とうとするそれだっ

た。村松は染み渡ってくる安心を覚え、暗い天井に向けてゆっくりと煙を吐く。
「斉藤さん、酔ってないね」
「村松さんこそ」
「俺は飲んでないから」
「居酒屋の雰囲気に酔ったりはしないんですね」
至って真面目な調子で言われ、村松は笑った。そんなふうに心配されているとは思っていなかった。
「下戸って知ってる？」
揶揄われていると思った斉藤は
「知りません」
と、唇を尖らせた。村松は斉藤の反応を見て、知っているだろうと分かって説明しなかった。
続きを遮るようにミルク珈琲が二つ、テーブルに置かれる。二人は無言になって、珈琲に手をつける。砂糖とミルクが入った珈琲は甘く、後から少しだけ苦味が口の中に広がる。

村松は不思議な夜を、目と耳で味わっていた。飲み会の後で、こうして女性と向かい合って珈琲を飲むなど想像したことがなかった。その相手が斉藤になるなどとは微塵も考えたことがなかった。

斉藤はその口振りや態度から明らかなように、人との関わりを避けるタイプだと判断している。けれども、サークルでの付き合いには村松よりもこまめに顔を出しており、周りから信頼や信用を得ているし、今日の飲み会などでも人に囲まれている際に嫌な顔一つ見せていない。

斉藤が朝に弱いということを知らず、こうして二人っきりで話す機会に恵まれてなかった村松は、自分が斉藤に避けられているのではないか、と思う。が、避けられているのであれば、こうして珈琲を飲む場を設けるとは思えない。酒を飲むとよく喋り、笑う人間が存在するが、斉藤がそれに該当するのか村松には分からない。

村松は斉藤と出会ってからの多くの時間をフランス文学の理解に割いてきた。就職が難しくなると分かっても、大学院への進学を考えたりしている。村松の頭の中に、こういう女に

対する扱い方の答えはどこにもない。
斉藤に訊かなければ分からないことだった。
村松は煙草を置き、斉藤がそうしたように至った真面目な調子で訊く。
「……俺のこと嫌い？」
嫌われているかどうかは分からないが、こうも態度が違うとそんな考えの一つは挟みたくなる。
再開された会話がそんな一言から始まると思ってなかった斉藤は、露骨に真意を尋ねる。
「はい？」
怪訝な目つきを、煙草を咥える村松に向ける。
この男はフランス文学の研究に夢中になり、人間との接し方を忘れてしまったのだろうかと斉藤は思いたくなる。数多の小説や随筆で何を学んだのだろうか。恋愛論は村松に何をもたらさなかったと見て取れる。
好きか嫌いかで問われると、どう扱えばいいか難しい。ただ、得意か得意ではないかと問

われるとすぐに答えられる。

斉藤は村松のことを得意な人間にカウントしていない。というのも、分からない部分が多過ぎるのだ。朝も昼も夜も調子が変わらない隣人という程度しか知らない。それでも数少ない部分から得意ではないと思える。

村松は焦ったように弁明する。

「いや、だって、朝と全然違うじゃん」

「あなたがいつも変わらないだけです」

斉藤の言葉は全然質問の答えではなかった。村松は急かすように問う。

「……つまり？」

「何がつまりなんでしょうか？」

「さっきの質問の答え」

朝も昼も夜も変わらないと思っている村松がやけに小さく見え、斉藤にとって愉快だった。斉藤は村松と玄関先で顔を合わせる朝を復讐するように、意地悪く確認する。

「私が村松さんを嫌いかどうかの答えですか？」
「そう改めて口にしなくても良くない？」
弱々しく反論する村松が可笑しくて、斉藤は明るい声で答える。
「嫌いだったら、もう帰ってますしきっと引っ越してます」
「良かった、嫌われているのかと思った」
ほっと胸を撫で下ろす村松に、斉藤はある期待を胸に懐いた。村松は斉藤が朝に弱いことを気づいているのではないだろうかという期待。
「一つ訊きますけど良いですか？」
「どうぞ」
「私に嫌われるようなこと、してるんですか？」
「分からない」
村松が嘘を言っていると斉藤には見えなかった。斉藤は首を傾げ、村松の言葉を繰り返し訊きかえす。

「うん、分からない」

村松はそれきり続きを口にしなかった。村松の頭の中では斉藤に嫌われるようなことをした記憶がなかったから。

斉藤は自分自身が朝に弱いことを告白しなかった。村松のように正直な性質ではない。性質とかそういうことではなくあまりに単純に、自分が朝に弱いということを話すのが恥ずかしかったのである。朝に無愛想な自分が村松に嫌われているのではないか、と思わせてしまった。そんなことを理解されたくない。

「……やっぱり、嫌いかもしれません」

村松は焦ったりすることなく、二本目の煙草の火を点けて落ち着いた調子で答える。

「無理に好きになる必要はないと思う」

「矛盾してませんか？」

「そう？」

「そうです。嫌われてるかどうか尋ねる口で、好きになる必要はないって答えるの、おかし

くありませんか？」

村松は肺の中に満ちた煙をゆっくりと吐き出し、斉藤の疑問に詳かに言葉を並べる。

「俺が恐れたのは、俺が無意識の間に斉藤さんに何かをしてしまって嫌われてしまった……俺の行為に対する好きか嫌いか。好きになる必要がないと言ったのは、斉藤さんの俺への感覚。好きになれない人間は少なからずいるだろう？」

「その好きになれない人間に村松さんが当てはまっていたら、どうするんですか？」

「当てはまらないよ」

自信満々に言い切った村松に、斉藤はどうして、と尋ねなかった。答えは先程、自分で答えてしまっていたから。村松も改めて口にしなかった。二人はいつもそうしているように無言の夜を暫しの間、共にした。熱く、甘いミルク珈琲を片手に。

二人の沈黙を、ラストオーダーですがという店員が破った。二人は会計を済ませ、階段を登る。

地上に戻ってくると満月の優しい光が、二人を照らす。ミルク珈琲で暖かくなった斉藤は

コートだけを羽織り、赤いマフラーは肩に掛けているだけだった。

「月が綺麗ですね」

斉藤の口から零れた言葉に、村松は足を止めた。先を歩く斉藤の足音だけが夜道に流れる。斉藤は着いてこない村松を不思議に思い、立ち止まって振り向く。先程よりも赤い顔をした村松が立っている。

斉藤は自分の発言の意味を理解して、瞬く間に真っ赤になった。マフラーを大急ぎで巻き付け、顔の一部分も隠す。そういう意味で言ったわけではなく、ただの詠嘆であると伝えたところでもう遅い。遅いというか、正直な村松のことを嫌いと思っていない自分自身に気づいている。嫌いではなく、もっと知りたいと思った。

村松はコクトーの小説を澁澤龍彦の翻訳で親しみ、小説における美を見出した。鈴木伸太郎の翻訳した数々の詩から象徴派の美を教えられた。村松自身も辞書を片手に英語やフランス語やドイツ語で書かれた作品を試みることがある。ゆえに、外国語を日本語に翻訳する難しさを知っている。その逆も知っている。そして夏目漱石が、とある言葉を今、斉藤が口に

したような言葉で翻訳したという俗説も知っている。
短いカフェでの会話の中で、斉藤が村松のように本音を明らかにしないことも察せられた。嫌われていないことも分かった。
村松は長い間、口を閉ざして、結局何も言わず、斉藤の隣に立った。斉藤は不安になって潤んだ瞳で村松を見上げる。
「何か言ったらどうですか？」
村松は斉藤にどういう言葉をかければいいのか分からなかった。斉藤のことを好きか嫌いかで考えると好きである。好きか嫌いかで問われれば答えられたのだが、問われ方が良くなかった。そういうふうに問わないことも分かる。
村松は斉藤がそうしたように過去の翻訳を口にした。ロシアの昔の作品の翻訳を。
「あなたのものだから」
村松と斉藤は並んで歩き出した。
駅前に戻って、同じ電車に乗り、同じ駅で降りて、同じ道を歩く。二人は示し合わせたよ

うに沈黙を守っている。斉藤のヒールの音だけが響く。ただ絡められた互いの指は熱かった。

〈了〉

来年の思い出

父親とか母親を起こさないように、そっと家を出た。車は朝までには戻しとく、と書き置きをして。

この前のサークルの飲み会で、今年で大学生活が最後になるので花見の下見はちゃんとしようと言われて、適当に相槌を打ちながら、俺は脳内で去年もそうしたように何ヶ所か車で巡ることを計画していた。自分一人で車を走らせて、めぼしいスポットを巡る気でいたら、いつの間かに言葉になっていたようだった。反感を買った。不公平だ、と。

サークル代表の鶴の一声で、恒例となるくじ引きの流れが作られた。俺は元々車を走らせる予定だったので、くじ引きには参加しなかった。

ペアが何組かできて、全てのペアが男女。変わり映えしないペアが生まれたけど、くじには逆らえないらしく、そういうことになった。自分とこれからこの車に乗り込む相手とは、その変わり映えのしないペアの一組。残りものには福があると信じている同士、と言えるかもしれない。

終電はとっくに終わり、大通りには乗客を乗せたタクシーが走っていたり、バイクやトラッ

クが走っている。その通りの流れに飲まれるように黄色い車を滑らせる。

細くて静かな通りでは、ボリュームを下げていたラジオの音量を少し大きくする。昨日一日中降っていた激しい雨は上がり、しばらくは台風一過で晴れるらしく、花見をするならば今週末が良いかもしれないなんてことも教えてくれる。

大通りを走っていくつかの通りに入ったり、抜けたりしているとタクシーの影は見えなくなり、バイクもトラックの影も少なくなる。この通りを走っているのは自分だけのように思える暗闇が、車窓を流れる。

実家の最寄り駅から三つも四つも離れたこの地は、時々この時間に訪れているはずなのにもかかわらず、全然知らない場所のように感じる。

通りの向こうで暗い影を作っている山のせいか春の風を受けざわざわとそよぐ竹林のせいか分からない。走ってきた大通りと比べて街灯が少ないためか、開いている店がないためか分からない。

しんとした静寂を破らないように、また、そっと、ラジオのボリュームを下げる。

いつものところで合流という事前の連絡通り、くじを引かない女こと一井の姿が駅前のコンビニにあった。コンビニは明るいけれど、環境に配慮してかトーンダウンした色味になっていて、不気味に感じる。ここは自分にとって静か過ぎて、目に映る全てが何となく恐ろしい。

そんなところで平気な顔をして大学で見る時と変わらない淡い顔立ちをした一井が立っていると、実はこの女は幽霊で、ヒッチハイクをして運転手を自分が亡くなった所に案内しているなんて言われても、信じてしまうかもしれない節がある。一井が幽霊じゃないことは昼間というか大学とかサークルで会っているから分かるのだけど、真夜中、詳しくない土地、ぽつんと建っているコンビニ、一人でいる女という要素が合わさると、ちょっと、良くない。

家賃がちょっと安いこの辺りに一人で住んでいるらしいけど、俺だったらもう少し人気のある所を選ぶ。昼間は賑やかで良い所って一井は言ってたけど、俺はちょっと遠慮したい。

助手席のドアを開けた一井は、カップホルダーに置かれているコンビニのコーヒーを見て、こっちに視線を向ける。穏やかで動きの少ない波のような視線。

「いる？」

「お守りみたいなもん」
「お守り？」
「寝ないためのお守り」
「カフェイン入ってるのに、お守りも何もなくない？」
「そういうもん」
一井という女は、朝も昼も夜も二人で会う時もサークルメンバー達と共に会う時も、いつでもテンションが一定で、穏やかで、喜怒哀楽が分かりにくくて、さっき覚えたちょっと良くない要素の一つを構築している。
真夜中の雰囲気をぶっ壊すような明るくてテンションの高い女だったら良かったかもしれないけど、多分俺が疲れるし、一井のような感じが真夜中には合っているかもしれない。
一井の視線も確認も適当に流して、切ったままだったラジオを思い出す。
「ラジオかける？」
助手席へと乗り込んできた一井は、空いているカップホルダーに自分の分の飲み物を置く。

目の前のコンビニのコーヒーだった。自分も買ってるじゃん……と何か言いたげな視線を向けると、さらっとした長い睫毛に流される。

「大丈夫」

俺の方から改めてコーヒーを話題にすることはできず、ラジオが大丈夫なら別のに話を移すしかない。

「じゃ、なんか音楽かける？」

「ユーロビート？」

このやり取りをすると、一井を乗せているな、と実感する。なんでか知らないけど、一井にとって車に乗っている時にかける音楽はユーロビート一択だ。ただ、この車の所有者は俺ではなく、父親で、父親の音楽遍歴にそんなテンポの激しい曲はない。俺や母親を乗せて出かける時に流れていたのは大体ラジオだったし。

「毎回ユーロビートって言うけど、好きなの？」

「そんな感じ、しない？」

「どういう感じ？」
「爆音で夜道を走る感じしない？」
「この車で、この時間に？」
「しない？」
「しないと思う」
一井の言うことは一理あるかもしれないけど、このぽってりとした黄色い車には似合わなさそうな感じだった。
会話が途切れて、いつまでもコンビニに停めているわけにはいかず、運転を再開する。
車が動き出すと、一井の視線はカーナビに移る。カーナビの案内はもう終わっている。
「目的地は？」
「去年と一緒」
「どこ？」
一井の細い指が目的地を入力しようとする。地名を伝え、道順は頭に入っていることも伝

えた。
「よく覚えてるね」
「秋にも行った」
真夜中に、一人で。
サークルで旅行をする前に、寒暖の差で紅葉が遅くなるらしい、とラジオが教えてくれたので、一応の予定に組み込んでいた。桜が良く見えるから、秋の紅葉も良く見えるだろうと思った。
「行ったっけ？」
一井が思い出そうとしているのは、サークルでの旅行のことだろう。サークルで行ったのは露天風呂付きの温泉宿で、露天風呂から紅葉が見れるのが良かった。ここからずっと遠くて、レンタカーを借りて高速も乗ったし、ハンドルを握るのを交代制にしたこともある。
一井の記憶と俺の記憶が合わないのは当然のことだった。
「俺は、行った」

「私は？」
「一人で行った」
「呼んでくれても良かったんじゃない？」
「……マジで言ってる？」
「うん」
「夜中でも？」
「何時？」
赤信号になって、車を停める。デジタル時計に視線を落とし、答える。
「今より遅い」
一井の視線もデジタル時計に落ちて、沈黙が生まれる。夜中の一時を回って、サークルメンバーを誘えるかってなると、難しい。しかも一井ってなると更に難しさを覚える。今はこうしてこの時間に車に乗ってるけど。
「お昼に行けば良くない？」

一井の疑問は、よく分かる。俺が一井の立場だったら、そう訊いていると思う。今夜のことも昼にすれば良いじゃない、って言う。

俺は昼に車を出すのが好きじゃない。渋滞にはまる可能性が高いし、人が多いし、パーキングエリアの値段も高いし、そもそも満車で停められない可能性もあるし……。昼は不便だ。

「俺が見たいのは、人じゃない」

「独り占めしたいタイプ？」

「そういうわけじゃない」

「そう？」

「そう」

信号が青に変わって、アクセルを踏む。一ヶ所目に向かいながら、ずっと謎だった一井のことを尋ねる。

「くじ、引かないの？」

今回に限ったことじゃないけど、一井はサークルでのくじ引きに参加しない。本人曰く、

残り物には福があるかららしいけど、別の理由があるのはその口振りから分かる。
「平等じゃないでしょ」
考えてもなかった答えに、すぐに訊き返す。
「平等ってなにが？」
「宮下くんも引いてないじゃん？」
「俺は引く必要がないだけ」
「選べる可能性はあったよ？」
「選べる？」
「ここに座る人」
シートを軽く叩く音が、車内に広がる。そんなことを考えたことがなかったので、本音が口から滑り落ちた。
「選んでどうすんの……」
俺は別に誰が助手席に座ろうと気にしないし、誰とペアになっても良い。これは何も俺が

サークルメンバーの人間関係を気にしていないとか興味がないとかそういうことではなくて、運転している時に気にするのは、もっと別のことというだけ。

無事故で運転して帰るということを考える。だから誰が座ろうと気にしないけど、確率の話で考えると、まぁ一井が座っている率が高い。

何人ものサークルメンバーが助手席に座ったけど、落ち着いて運転できるのは、多分、一井の時だと思う。隣でむちゃくちゃ話したり、寝たり、指示を出したりしない。程良く運転に集中できるのは、ありがたい。

一井の本当にそう思っているのか分からない声が飛んでくる。

「意外」

「何が？」

「選ぶタイプだと思った」

「俺が？」

「うん」

「なんで？」
微妙な間があって、内緒と言われた。そう言われるとそれ以上、立ち入るのは難しくなって、俺は無言で車を走らせる。サークルメンバーの中で、俺は運転にうるさいタイプと思われているのかもしれない。
一井もふと黙って、深い夜が流れるのを助手席の窓から眺めていた。
花見の下見一ヶ所目は、神社。近くのパーキングに車を停めて、徒歩で門をくぐる。車を運転している時には丁度良いように思った夜風が少し冷たく感じる。
「寒くない？」
隣を歩く一井に尋ねると、買ったコーヒーは一口飲んでから答えられる。
「欲しいの？」
「飲み過ぎは良くない」
「この時間だったらもう気にしなくても良くない？」
「帰ってから寝られないのは困るくない？」

「そう？」
「そう」
そんなふうに話しながら、石畳を歩き、砂利道を歩く、砂利道の真ん中に、竹垣で取り囲まれた中に一本だけ枝垂れ桜があった。
桜の樹は太く、巨大で、凄まじい存在感を放っている。枝の先まで十二分な力を宿しているように固さを感じる。
まだ十分に花開いていないように見えて、先の大雨でいくらか散ったように思えるけど、ライトアップされて見える桜の花は、夜の闇を割くように白い。儚い、という言葉とは対極に位置しているような瑞々しい生がそこにはあった。
桜の樹の下には死体が埋まっていると書いた小説のことや満開の桜の花の下で生涯を終えたいと歌った歌人のことを思い出す。そういう人間の生命力を得て、存在していると当然のように思わせるものが、この枝垂れ桜にはあった。
圧巻されて、呆然と見てしまう。誰かと来たことを忘れさせる、桜を観に来たことを否が

応でも思い出させる。

「……いけないね」

「……うん、いけない」

俺が先に言ったのか一井が言ったのか分からなかったが、俺も一井もその一言で会話を終わらせ、枝垂れ桜に背を向けて帰る。

石畳へと戻って、一井の持っていたコーヒーを、冷えるから一口欲しいと言って、貰った。砂糖もミルクも入っていない苦くて黒い液体が、俺を現実へと帰してくれたようだった。

大学生活最後の花見を飾るには、厳か過ぎた。昼間、青空の下で行う花見でも、きっと主役になってしまう。花見なのだから主役は桜で良いのかもしれないけど、俺達には似合わない。格式の高さを感じた。一献の杯を互いに分け合う、そんな感じがあそこには相応しい。

大学生達が缶ビールやチューハイを片手に騒ぐ場ではない。あそこはブルーシートは敷けないし、昼間にはあの桜の周りや石畳の左右に出店が立ち並び、随分と賑々しくなるので、きっと俺達の居場所はない。

パーキングを出て、二つ目へと向かう。大通りを走らせ、また別の大通りに入ると目的地は近い。

車窓を流れる景色に見覚えがあったらしい一井が、声を上げる。

「去年来たね」

「今年もここにする？」

俺の脳裏には先程の枝垂れ桜があって、全然そうは思っていないのに勘違いさせる何かがあった。

「不満気？」

流れる夜の景色を追っていた一井の視線が、俺の顔へと移る。俺は大袈裟に首を振って、正直に答える。

「不満ってわけじゃないけど、代わり映えしなくない？三年連続になるじゃん？」

「確かに……。じゃ、宮下くんご自慢の花見会場はどこ？」

黙っていると、一井は次の質問を投げかけてくる。

「もしかしてもう行ったり？」
「まだ」
「今回の候補の中にある？」
一井がそうやって話を終わらせたように、微妙な沈黙を作った。すると一井の視線が柔らかいものに変わる。上手くいったと思ったのだけど、一井の反応を見るに全然そうじゃないらしい。俺は正直に答えた。
「ある」
一井の微笑が車の中に響く。
「宮下くん、そういう時は黙っておくのが正解」
「無理言うな」
橋の河岸から桜を植えられていて、橋の突き当たりには夜の間は閉ざされている神社の門がある。敷地の中には公園もあって、一昨年去年と花見をした所だった。
静かな通りを走りながら、今は入れない門の向こう側の桜がどれくらい花開いているか想

像する。ここも先の雨の影響を受けて、水面に花を散らしている。来週の今頃はもしかすれば門の中の道は、もしかすれば桜の花で染め上げられているかもしれない。

河岸の桜を見て中の開花状況を考えて、折り返す。橋を越えて、大通りへと戻りながら声をかける。

「次、ちょっと遠いし、どこかでコンビニ寄る？」

「どこ？」

地名を告げると、一井は明らかに困ったような吐息を零す。

「次で最後だから」

励ますように最後の目的地であることを告げると、一井の声が心なしか弾んだようだった。

「じゃ、次が宮下くんが秘密にしたかった場所か」

次の目的地は、今まで走ってきた大通りの突き当たりにある。長い一本道を走り続ける。走っていて一番気持ちの良いルート。元々俺一人で行く予定だったので、そういうルートを設定した。効率良く順番に巡るのではなく、走っていて楽しいルートにした。だから、俺が

秘密にしたかったスポットもルートに入れていた。

一井が助手席に座ると分かった段階でルートを変更しても良かったのだけど、何だかそうする気は起きなかった。言わなかったら、バレないと思っていたし。

途中でコンビニへ寄って、ホットドックと甘いコーヒーを買った。コーンポタージュを買った一井は運転席でホットドッグを齧る俺に、生暖かい視線を送る。無視するには難しくて声をかける。コーヒーを一口貰ったことがあるし、一口の交換としては全然釣り合わないと思うけど、一口であることに変わりはない。一井の言葉を借りるのなら、平等じゃない、というやつなのかもしれないあるいはまだコーヒーが欲しいのかもしれない。

「欲しいの？」

「ダイエット中」

必要ないと思うけど、という言葉をコーヒーと一緒に飲み込んで、ホットドックを食べ終えると車を動かす。

一井も俺も無言の時間が続いて、俺はそっとラジオをかける。

真夜中の番組は、リスナーからの思い出の曲を募り、流していた。リクエストされた数々の曲は、どれもこの時期に似合う出会いと別れを歌っていた。そういうミニコーナーだと、最後に分かった。

俺も一井もずっと無言だった。何かを考え、話せる話題はあったはずなのに、示し合わせたように無言だったのは、きっと話題が卒業になってしまう予感を覚えたからだろう。

走り続けた大通りは目的地に近づけば近づくほど静かになり、暗さが増す。橋を超えた頃になると自分の車しか走っていないようだった。橋を超えると短い山道に差し掛かり、直進すれば目的地、左へ行けば小高い山を登る。

目的地は、車道を円状に囲んだ中に位置していて、二つの地に橋を架けて景勝地と称していた。俺達が迷子にならないように等間隔に並んだ灯籠には灯りが灯され、道順を示すように橋の向こう側まで続いている。

温かな灯籠の火の中で見える桜は、先に見た枝垂れ桜よりも随分と優しいように思えた。

川の向こう側の北側は十字路になっていて、右へ曲がれば別の大通りに出て、左に曲がれ

ば別の山へと向かう。

こちら側の駐車場は全てどこも夜間は閉鎖しているようで、駐車場に停めるためだけに北側へ走らせるのは味気ない気がして、路肩に停める。俺も一井も車から出て、景勝地を歩む。飲み切れなかったコーヒーとコーンポタージュをそれぞれ持って。

温かな灯籠の光を受ける一井の横顔は、普段よりも穏やかで、微笑んでいるように見えた。土は先の雨を受けて柔らかく、水たまりがあり、灯籠の光が届いていない奥の方も同じように花見に適していないだろう。

灯籠の光を追いかけるように歩むと、小さな橋があり、二手に分かれている道に差し掛かる。足を止めて、声をかける。

「どっち行く？」

「おすすめは？」

「左」

「じゃ、左」

左の道は石畳で舗装されていて、こつこつと小気味良い足音が響く。左手にはシャッターを下ろした飲食店や土産物屋が脇に連なっている。右手には川が流れていて、河岸には桜。雨は局所的に降っただけのかと思わせるように枝先は円な花びら。

山に囲まれ、飲食店が閉まった静かなこの辺りは、一井が住んでいる所と変わらないように思えた。一井の住んでいる所と変わっている部分といえば、川が流れているところや桜が温かな光に濡れているところぐらいだろう。

石畳を歩き終えると、車道が広がっている。右手は橋、左手は闇。左手を進んで歩けば、車を停めた所が見えてくるのだろう。

一井は石畳の側に置かれているベンチに腰掛け、ふっと息を吐いた。満足気に、納得したような吐息が、夜を流れる。

「静かで明るくて、良いね」

一井の隣に腰を下ろして、

「うん、だから気に入ってる」

と答える。

ベンチに腰掛けて周りに目を向ければ、対岸の桜が仄かに明るいのが見える。雨が降るまでの陽の光を十分に受けて光を溜めていたように見えた。

「ここにする？」

桜が綺麗で騒げる場所もあって、車を出せば大通りにあったコンビニやスーパーにも行ける。大学最後の花見をするには、適している場所のようだった。一井がそう確認するのも、無理はない。むしろ当然のことで、ここにしようか、と提案しているようだった。

でも、と思う。否定するように俺は首を微かに横に振って、困ったように笑う。一井は、どうしてと尋ねることも否定する言葉を並べることなく、そっか、と言う。その気持ち、ちょっと分かるよ、と続けて。

ここを花見会場にしてはいけない理由を話すのは、きっと俺の役目だ。

ここで花見をしても良い。でも、大学生活最後を飾る花見会場としては、あまりに新しい。新鮮で綺麗で、俺達の思い出がない。

一井はそんなことを周りに言うとは考えてないけど、ここは俺のお気に入りのスポットの一つで、サークルメンバーで訪れるのは早いように思う。早いというのはおかしいことかもしれないけど、そんなふうに思う。俺だけが知っている秘密の場所を知られるのを防ぎたいわけじゃない。知ってもらえるのなら全然良かった。でも、今年じゃない。俺は別に、独り占めしたいタイプじゃないから。

橋の向こうに広がる夜空に、月が見えた。雨で洗い流された夜空に輝く月は綺麗だった。

我、君を愛すという英文を、夏目漱石が月が綺麗ですねと翻訳したことがあるという俗説を思い出した。

一井もその俗説を知っているだろう。この、今、俺と一井しかいない夜に、唐突に、月が綺麗ですねと言えば、それがどういうことなのか一井も分かるだろう。

でも全ての話の腰を折ってまで、そういうことを話せる気にはなれなかった。

「来年、だったら良い」

長いようで短い沈黙を破った俺の言葉は、そんなものだった。なるべく自然に発したつも

りの言葉。

一井の口が少し動いて、来年？ という音になって、笑みが零れる。寂しさを漂わせた微笑。来年の今頃がどういう時期か分かっている人のそれ。

今年の花見も終わっていないのに、随分と気が早い話だと誰もが思うだろう。でも俺は自然と、来年の花見のことを考えた。今年の花見会場は俺達サークルメンバーの思い出が詰まった所で開催することにしたから。

大学を卒業して社会人として働きはじめる時期かもしれない。あるいは仕事に忙しくて花見のことなんか忘れている頃かもしれない。そういう真新しい春に、去年の約束を思い出してほしかった。大学最後の春に約束した果たせるかも分からない約束のことを。春の真夜中に、大学時代の友達と来た景勝地のことを思い出してほしかった。

俺も一井もこの一年、環境を大きく変えるために動きまくるのに、簡単に一年先の未来に再会を約束してしまう、約束できる関係でありたかった。そういう関係を続けておきたかった。

「皆と？」

一井の短い質問に、俺は否定の言葉を並べた。それで、俺が誰と来年もここに足を運びたいのか伝わった。

一井ははにかむと、恥じらいを隠すように言う。

「やっぱり、独り占めしたいタイプじゃん」

今夜、この夜の出来事を特別だと思っているのは、特別だと思いたいのは、俺だけじゃなかった。

俺と一井の火照った頬を、夜風が通り過ぎる。桜の花びらが揺れた。〈了〉

63円の縁

高橋健二は大学の冬休みに実家へと帰省し、何日ものんびりしていた。実家で一人で暮らす祖母は、講義とバイトとサークル活動という大学生らしく忙しい日々に疲れた健二と違い、きびきびと二階へと続く階段を上ったり下りたりしたり、踏み台を巧みに使って高い所の拭き掃除をしていた。健二も手伝おうとしたのだが、お盆と年末年始にしかここに足を運ばない孫には、勝手が分からず、炬燵を定位置として動かないことしかできない。丁度、昔この家で飼っていた猫のように。

ゆえに健二は帰省してから居間の炬燵でくつろぎ、テレビを見て過ごしている。健二の前には、数日前に祖母から渡された一枚の年賀葉書が置いてある。祖母曰く、大掃除の時に見つかったので、書きたいなら書けばいい、とのことだ。

祖母は年賀葉書を渡しても、以降の健二のことなど気にかけることなく、大掃除を終わらせ、今では台所で年越し蕎麦の用意をしている。

祖母は二人分の年越しそばを作り終えると、炬燵へと戻ってくる。

「まだ書いてないの？」

健二は白紙のままの年賀葉書を机の端に追い遣って、自分を守るかのように呟いた。
「急過ぎるんよ」
祖母は健二の右隣、テレビが真正面に見える所に座ると、蕎麦を啜って慮るように言う。
「……健二あんたもしかして、大学でひとりぼっちかい？」
「今はこういうのも全部、スマホでやるんだよ」
健二はそう言って、ズボンのポケットからスマホを取り出した。母親や兄と姉から連絡が来ている通知が画面には表示されている。
健二が実家に帰ってきたのは、クリスマスが終わった頃で、父親と母親よりも早い。父親も母親も今夜、年越しの瞬間に間に合うように来るらしい。
健二としては大晦日の日付が変わる頃に父親達と同じように実家に帰っても良かったのだが、祖母の様子を一足先に見に行くように言われた。兄や姉も健二のように一人で暮らしているのだから、何も健二だけがまるで命令かのように言われたわけではないのだが、社会人である上の二人と大学生である健二とでは、どちらが融通が効くかは火を見るより明らかで、

誰が一足先に行くのかは明白だった。

社会人の二人は大晦日と三が日の四連休を取るのが精一杯らしい。健二はこれを、二人共、面倒なことを避けるためにそう言っていると思っている。夏のお盆の頃は休めて、冬が難しいということがあるのだろうか、と疑っている。そんなふうに疑ってしまうのは、実家が建てられている場所が場所だからだ。

高橋家の実家は、都心部から離れた所にある。二階建ての家は特急に乗り、車を走らせた、山の麓に見えてくる。

何をするにもバスか車がなければならない。車を出せば、駅前にある大きなショッピングモールや商店街にアクセスできる。コンビニへ行くのにも、車を出さねばならない。健二も兄も姉も、不便だと思っている。だから、兄と姉は年が明けてから帰省するのだろう、と思っている。

健二は夏と冬に帰る度に辺鄙な所だと痛感するが、祖母は全然そんなことを思っていないらしい。祖父が亡くなる前からも車に乗っていたが、今では大切な社会との繋がりも車が担っ

てくれている、らしい。車に乗るのが一層楽しくなった、とも言っていた。

健二には全く分からない感覚だった。多くのことをスマホで済ませ、コンビニと通販を愛用して家からはあまり出ない健二には、祖母のことがよく分からない。

分からないのはそういう感覚だけではなく、年賀葉書のこともそうだ。祖母はよく葉書を書く。

息子や孫のことを気にかけるのは、暑中見舞いと寒中見舞いと年賀葉書を書き終えた後だ。社会との繋がりが薄い年齢を迎えた祖母にとって、これら三つの葉書は大切な公的な仕事のようだった。これは何も還暦を迎えた頃に始まったことではなく、健二や父親達がまだこの家で祖父母達と暮らしていた時からのことだ。毎年、書いている。健二も祖母に倣い、書くこともあったが、中学に入学した頃にスマホを手に入れてからは、書かなくなった。名前は知っているが住所を知らない友達の方が遥かに多い。

が、今こうして年賀葉書を渡され、書く相手が思い浮かばなかったわけではない。この年賀葉書を送りたい相手の顔はすぐに思い浮かんだ。

大学に入学してから知り合った年上の女性で、早川楓。

大学に入学したが高校生の感覚を引きずっている健二にとって、二つ年上の楓は随分と落ち着いていた女性に見えた。同じサークルに所属した健二を可愛がってくれることもあれば、単位を取るコツなんていうのも教えてくれる、優しくて気の利く女性である。

スマホで連絡を取り合うことはあるが、年賀葉書を送れるかどうか、となると難しい。

どこに住んでいるのかは、同じバイト先で残業した時や飲み会で酔っ払った楓を送ることもあり、知っているが書いて送るとなると難しくなる。そもそも送っていいのか分からない。スマホで新年の挨拶や誕生日を祝うことはできるが、年賀葉書はそういうのとは違うと思う。

祖母は全然そんなことは気にしていないようだが、健二達の世代にとって、葉書は重い。スマホもあるのにどうしてわざわざ、葉書を？と思う。健二は葉書を受け取ることがあったとしたら、きっとそう思う。健二達の世代にとって、葉書を書き送るという行為は一つも二つも昔の行為であり、葉書自体の持つ重量以上の重さがある。

電話をかけ、年賀葉書を送りたいので住所を教えてください、と一言言う必要があるし、

宛名と住所を書き、裏面に書く文章を考え、投函しなければならない。そういう手間暇かかることは、重い。

「伸びるよ」

祖母に言われ、健二はそばを啜る。食べながら、筆まめの祖母に尋ねる。

「何、書くの？」

「何書くって何が？」

「年賀状だよ」

「え？」

「え？」

祖母は健二の質問に大層驚いたように目を丸くして、あっけからんとした調子で答える。

「何でも良いじゃない」

祖母の言っていることが間違っていると思っているわけではなく、健二は心のどこかで祖母のその発言を正しいと思っている。思っているが、その発言を受けて実行に移せるかどう

かは別のことである。理論としては正しいと思うが、健二自身の心や感情の部分では納得できない。

「……それマジで言ってる？」

「書きたい人がいれば、書きたいことなんてたくさん浮かぶよ」

それができれば苦労しないのだが、祖母には伝わっていないようだった。健二は堪えきれなかった落胆を滲ませる。

「俺は婆ちゃんみたいに慣れてないの。ないの、なんかテンプレみたいなやつ」

「……そんなテンプレの年賀状をもらって、嬉しい？」

祖母に問われ、健二は押し黙った。黙ってはいけないと分かっていたし、こうして黙ることが、そういうテンプレートに染まった葉書に対する健二の答えだと証明することも分かっていた。独創的である必要も、オリジナリティ溢れた文章を書きたいというわけではない。ただ折角、年賀葉書を書くのに型にハマった文言しか書けないのは、嫌だ。そういう文章を書くのならば、スマホでスタンプ一つ送れば良い。

「今日、送っても明日には届かないじゃん」

年賀葉書を書くことが疎くなった健二でも、大晦日にポストの投函して元旦に相手に届かないことは分かる。健二の記憶が正しければ、クリスマスに書き上げ、投函しなければいなかったはずだ。

だから書かなくても良い理由にならないことは、健二には分かっているし、間に合わないから書かないと言われた祖母が年賀葉書を健二から取り上げることをしないことも分かっていた。健二に、寒中見舞いという年賀葉書以外で冬場に葉書を出す必要があることを教えたのは、誰でもない祖母だ。

だから、次に祖母の口から出る言葉は、寒中見舞いにするかい、だ。

「だったら……」

「しないし、書かない」

健二は祖母に皆まで言われる前に拒んだ。

テレビから流れる歌番組が、居間を支配する。

葉書を書くことに慣れた、送られることにも慣れている祖母ならば寒中見舞いの扱いもお手のものだろう。しかし健二には扱いが難しく、きっと受け取った楓もどうすればいいのか、どういう対応をすればいいのか分からなくなる。年賀葉書であれば、寒中見舞いよりも扱いやすい。送ってもおかしくはない、と思われるだろう。そういう昔のことを好むのだろう、と好意的に捉えられるかもしれない。

健二は楓に嫌われたくないのである。年賀葉書一通を送り、重たい男と思われたくないのである。これが楓以外の異性であれば別にそこまでのことは思わないのだが、楓相手となると話は変わってくる。

しかし健二が年賀葉書を送りたい相手を考えた時、誰よりも早く思い浮かんだのは楓だった。

年賀葉書を送りたい相手であるが、送ることによってマイナスな方向に思われたくない。送らないという行動を採れば、そういうマイナスな方向に健二が思われることはないのだが、そうすれば楓にとって、健二は他の大学生と変わりない。それはそれで好ましく思えない。

曲が終わると、祖母は口を開けた。
「書きたい相手はいるけど、書くことは浮かばない……良いことだよ」
祖母に羨むように見られ、健二は色々と言いたいことがあったがまず真っ先に否定しなければならない部分から言葉にする。
「書きたい人がいるとか言ってなくない？」
健二は祖母に一言も楓のことを、年賀葉書を送りたい相手がいると話した覚えはない。大学でひとりぼっちではないことを伝えただけだ。
祖母は健二の疑問を聞いても、全然驚いた素振りを見せない。
「書きたい相手がいないなら最初に訊くのは、誰に送ればいいのか分からないって訊くと思う」
「相手が誰だろうと書く内容はそんなに変わらないじゃん」
「あんたはそんなことしないと婆ちゃん知ってるよ。あんたはちゃんと相手のことを思うし、だから悩んでいるんだろう？」
「面倒になって、新年の挨拶しか書かない可能性はあるよ？」

「だったらもう書いてるんじゃないか？」

健二は虚を突かれたのか口を閉ざした。蕎麦が伸びる前に食べ終える。祖母はそれ以上は何も言わず、二人分の食器を流しへと持って行く。健二は祖母の丸まった背中に無愛想な言葉を投げかける。

「婆ちゃんは、そういうことなかったわけ？」

筆まめな祖母のことだ、多くの人に葉書や手紙を送る中に、健二と同じような体験をしたことはあるはずだろう。きっともしかすれば、健二よりもそういう経験を何度もしているかもしれない。送りたい相手は思い浮かぶが、どういう文章を書けば良いのか分からない人は、きっといたことだろう。もしかすれば、その人は祖父かもしれない。健二はそんなことを思った。

流しでは水が勢い良く流れ、鍋や丼鉢を洗うガチャガチャという音が響いていた。祖母は大きな音と重なるように、昔を懐かしんだような柔らかい声で答える。

「あったよ」

もし健二が年賀葉書をかくことに悩んでいなければ、相手のことを尋ねたことだろう。今の健二が相手のことを尋ねると、同じように楓のことを話さなければならないように思えた。避けたいことであった。祖母がどのようにして手紙を書いたのか知りたいという思いが勝った。

「……どうしたわけ？」

「どうしたってどういうことさ？」

「相手のことを思って考えたら、書けた？」

「全然だよ。反対に何も書かない方が良いんじゃないか、なんて思うこともあったよ」

年賀葉書を前にして一人思い悩んでいるのが健二だけではないと分かり、心が軽くなり、頬が緩くなる。良かった、と呟いた健二の言葉は、流しに立っている祖母のところまでは届かなかったようだ。

「だから、正直に書いたよ」

思ってもなかった返答に、健二は大きな声を上げた。

「正直？」

「そうさ、きっと他にも書くべきことはあったと思いますが何を書けばいいのか分かりません。でも、あなたとは今後も良い関係でいたいです。そんなことを書いたよ」

きゅっと蛇口が捻られ、水の流れる音が止まった。だから、健二の素直な感想はしっかりと祖母の耳に届いた。

「凄いね……」

「凄くなんかないよ」

「いや、凄いよ。勇気あるね」

「勇気より学が欲しかったねぇ……。辞書には載ってない、上手く自分の気持ちを伝えられる頭がさ……。自分の気持ちを別の言葉に置き換えて伝えられたら、良いことじゃないか」

健二は祖母のように書けるだろうか。楓に自らの気持ちを正直に打ち明けられるとは思えない。できるかもしれないが、あくまでできるかもしれないというもので、確証はどこにもない。

祖母が欲した学を、健二は持っているだろうか。大学に進学しなかった祖母からしてみれ

ば、健二は学があるかもしれないが、だったらもう年賀葉書は書き上がっていることだろう。自分の気持ちを上手く伝えられる術を持っていれば……。

健二は祖母のように正直でなければ勇気もなく、頭も良くない。どこにでもいる普通の大学生である。けれども、楓のことを思う気持ちは人一倍ある。そう信じているし、自らの楓への想いを否定したくない。

このままここに居れば、年越しの瞬間まで年賀葉書をどうするか悩んでしまいそうで、健二は重たい腰を上げる。

「ちょっと上で書いてくる」

そう言って、年賀葉書とペンを持ち、二階へと上がる。

「年が明けたら、降りて来なよ」

「もうすぐじゃん」

「婆ちゃんに寂しい思いをさせるんじゃないよ」

「……今年中に降りて来るよ」

一階は祖母の寝床があり、健二達の寝床や荷物は全て二階に置いておくように言われた。健二に当てがわれた部屋は南向きの四畳半の和室で、かつては父が自室として使っていた部屋である。

読まなくなった本や季節ものの衣類などが部屋の端に置かれ、空いたスペースに健二の寝床を用意されている。南向きの四角い窓の下には、黒い机が置かれており、これは父が昔使っていた物だった。この机で一生懸命勉強して大学に合格したと祖母はよく話し、だから色々と修理してもらってまだ使えるようにしているようだった。

健二はその机の前に腰を下ろし、年賀葉書とペンを置いた。暖房や炬燵や蕎麦で火照る身体を冷ますように、窓を開ける。

夜風がすぐに入り込んで来た。火照った頬や身体に気持ちが良い。

夜空には雲一つなく、どこまでも澄んだ暗闇が広がっている。窓からぐっと身を乗り出してみると、空に少しだけ近づいたような気になる。澄み渡った空に輝く星は、いつ見ても綺麗だった。

星よりもずっと明るい月は欠けていることなく、真ん丸とした姿を、健二の前に曝け出している。月は一ヶ月に一度、全てを曝け出す勇気を手に入れるらしい。

健二は全く唐突に、とある通説を思い出した。夏目漱石が、月が綺麗ですね、という日本語にどういう英語を当てはめ、翻訳したのかを。

健二は満月を眺め、一階では得られなかった勇気を得たように思えた。健二は身体を縮こめると、窓をそっと閉める。年賀葉書に向き合うと、意を決したように息を吐き、ペンを執る。

満月に背中を押されたような気がする。夏目漱石の通説に背中を押されたという方が適切だろう。夏目漱石のことは詳しく知らないが、先生や祖母達に教えてもらった覚えがある。

近代を代表する小説家であり、イギリスに留学したり、大学で教鞭を執っていたような人だ。そんな人でも、愛しているを愛していると訳さない。日本人はそんなふうに愛していると言わないらしい。そういう通説がある。

だから、健二が楓に自らの思いを正直に伝えられないのは当然のことのように思えた。

楓に自分自身のことを悪く思われるのは、好ましくない。しかし、だからといって、この

ままで良いとは思いたくない。年下の男の子のままだと思われるのは、少しだけ、嫌だ。

自分の気持ちを正直に伝えられるのならば、それがきっと良いだろう。健二は少なくとも、勇気を出して、正直に伝えられることを良いと思っている。が、今の健二にそんな勇気はない。別の言葉で、楓に伝えることしかできない。

別の言葉を用いる以上、正しく伝わるかどうかは分からない。不安がないといえば嘘になる。けれども、何もしないよりはずっとずっと良かった。

健二はようやく年賀葉書を書き始めた。一階では祖母がテレビで鐘の音を聞いているようだった。

※

三が日を実家で過ごした早川楓は、久し振りに一人で暮らしている賃貸マンションのポストを開けた。美容院やいつ行ったか覚えていないブランドショップからの新年の挨拶葉書の

中に、一通だけ普通の年賀葉書がある。

「……ん？」

顔の前でぐるぐると巻いた分厚いマフラーの中で、疑問符を一つ零す。漏れた息が眼鏡のレンズを曇らせた。眼鏡のレンズをハンカチで拭いて、宛名を見る。

高橋健二と書かれており、大学の後輩からの年賀葉書だと分かった。

消印は健二が住んでいるところではなかった。実家に帰っていると冬休みに入る前に話していたことを思い出す。バイト先のシフトについて相談されたことも思い出す。健二が年末も年始もバイトに入らなかったので、楓は新年を迎えるぎりぎりまでバイト先にいた。

思い返すと少し腹が立つことなのだが、全て去年のことである。新年を迎え、三が日も過ぎた今、蒸し返していい感情ではない。

意外、という一言に、楓は健二に関する全てをまとめて、自動ロックを解除して、エントランスを通り、家へと帰る。

楓はローソファーに背中を預けると、健二から送られた年賀葉書に目を通す。葉書の裏面

は、端に謹賀新年と門松が印刷されたシンプルなもの。

――月が綺麗なので、ふと早川さんのことを思い出しました。だから、書こうと思いました。バイトとか色々任せちゃって、済みません。お陰で良い年末年始です。ありがとうございます。返事待ってます。住所は表と違うので、下記まで。ところで、初詣って行きました？――

健二の字は見かけによらず細かく、一字一句を丁寧に書こうという気概が見て取れた。大学に提出する書類は適当にテンプレートを微かに変えたものしか書かないのに。

楓はローテーブルに置いたスマホに目を遣った。健二に連絡を入れようと思えば、すぐにできるだろう。電話もすぐだ。年賀葉書を届いたことを伝えるなど、すぐだろう。ついでに年末の五連勤がいかにしんどかったのか伝えても良いのかもしれない。

どうして急に年賀葉書を出したのか訊いても良いのかもしれない。実家に帰っている間に何かあったのだろと想像できるが、それでも色々と訊いても良いのかもしれない。

健二に訊きたいことは色々とある。でもきっと、それはスマホで済まして良いことではないのだろう。スマホで済ませるのならば、健二は新年の迎えた瞬間に連絡を入れるはずだ。でも、健二はそういうことはせず、年賀葉書を選んだ。加えて、返事を書きやすいことが、裏には書いてある。

健二から年賀葉書を受け取り、楓は懐かしい気持ちになった。楓にも年賀葉書を書いている時期があって、確かスマホで友達と連絡を取り合うようになる前は、こうして書いていた。住所を教えてもらい、何を書くのか考え、実際に手を動かし書き、自分の手でポストに投函した。そういう手間暇をかかることをしても苦でもない相手を選んで。

健二にとって、楓はそういう相手なのだろう。

健二に訊きたいことは、とてもだが年賀葉書一枚に収まるような量ではなかったし、何度も葉書を書き合い、届くまで待ち続けられるような関係でもない。健二も楓も、スマホで連絡を取り合う速さに慣れており、その速さを当たり前だと思っている。

だから、楓が健二に年賀葉書を送るのはきっとこれが最初で最後だろう。スマホ一台で連

絡を取り合えるこの現代で、わざわざ葉書を選択した年下の男に返事を書くなどということは。こういうことをするのは、健二より年上である楓の方なのではないだろうか。二つ年が違うだけで、そんなふうに思ってしまうのは、おかしいことかもしれない。

楓は健二から受け取った年賀葉書を小さな鞄にしまい、家を出て、郵便局へ足を運んだ。年賀葉書を一通買った。六十三円だった。

楓はその場で年賀葉書の両面を埋めた。健二のように長い文章は思い浮かばなかった。最低限と思えるような言葉を並べるだけだった。

――今年もよろしく。初詣は、まだ。一緒に行く？　まぁ詳しくは冬休みが終わったら話すわ。色々話したいことがあるから――

楓は返事をポストに入れて、家へと帰る。その道中、ふと、健二の書いていた文章を思い出した。

月が綺麗だから楓を思い出すというのは、どういうことなのだろうか。
我、君を愛すと訳せる言葉を、夏目漱石は月が綺麗ですね、と訳した通説がある。
楓は足を止め、出てきたばかりの郵便局を見上げる。
「……まさか、ね？」
スマホですぐに真意を問うことはできたが、そうしてはならないと思った。〈了〉

冬と春

冬の夜明け前の空が綺麗だと知ったのは、ここ最近。大学に入って二年が経ち、そろそろ三年に差し掛かろうという頃。空気が澄んで、真夜中の間に瞬いていた星や月の気配を感じられる。木曜日の朝はいつだって普段より早く起きる。

春休みが近づき、浮き足立っている気配が大学全体を包んでいるけれど、私には早急に決めないといけないことがある。研究室をどこにするかとかそ卒業後の進路のこととかではなくて、もっと個人的なこと。

私には、時間が必要だと思う。でも私にはこれまで沢山の時間があったから、時間が必要だと思うのは、きっと都合の良い、言い訳なんだと思う。大学に入学してからの時間が沢山あったのに、私はその時間を上手く使えなかったと認識している。

学校に男の子がいるっていう環境に慣れるのに一年を要したからだ。要したというのは男の子との接し方というものではなく、中高と女子校でしかも寮生だった私の適当になっていた生活を直すために要した時間であり、メイクやファッションを整えるのに必要だった時間と言い換えた方が適切だろう。

周りの友達は、そういうことを容易く行え、男の子と話し、距離を縮め、恋人になれたりしている。私と同じように中高と女子校にいた友達も、その類に漏れない。

私が通っていた全寮制の女子校は、女子大の付属で、特に希望がなければ、中高大とエスカレーター方式。中学の頃から仲の良い友達達に囲まれて、大学卒業までその関係は続いたことだろう。

でも私はその園から離れ、一人で暮らしている。

社会に出てから苦労するのではないかと思い、社会でそつなく問題なく暮らしていくための前段階として、共学の大学への進学を選んだ。建前としては完璧だと自負している。両親も周りも納得してくれたし。

ただ本音は社会がどうのこうのということではなく、もっと単純だ。

恋人が欲しかった。

女子校というのは共学の中学校や高校と違うところが色々と違うところがあるけれど、女の子が女の子に友情を超えた感情を懐くことがある。全ての女の子が女の子にそういう感情

を懐くわけではないし、学校の外に男の子の恋人がいる子もいた。ただ中高大と女子校で過ごし、社会に出るまで、男の子の恋人を知らずに過ごすという子もいて、私はそうなってしまいそうだった。

それは嫌だった。

ただ、そういう気持ちで大学に入学したのが邪だというのか、まるで罰のように、恋人はできていない。

気になる男の子がいないというわけじゃない。いる、いるけど、そういう関係にはなれていない。

一年の頃から見たことがあり、二年の時には距離が近づいて、今までずっと、その関係のまま。木曜日の朝に、カフェで会う。

今日、一番綺麗な私で家を出る。

大学から少し離れたところにあるカフェは古民家を改装していて、外から見ただけではカフェか家か分からない。高い天井へと繋がるように壁一面の本棚があって、沢山の本が詰まっ

ている。文学や旅行記からエッセイから建築関係、美術書もあれば辞書もある。

朝も昼も夜も深夜もやっているこのカフェは、いつでも疎らにお客さんがいて、他のカフェにあるような混雑を味わったことがない。朝の忙しなさとは無縁でマイペースに過ごせるカフェで、平日の木曜日の一限目がずっと遠くにあるように感じられて気に入っている。

気に入っているのは私だけじゃなかった。店の奥にあるテーブル席に、私と同じ大学に通う、線の細い男の子の姿があった。

私が歩み寄っていることに気づいたのか、男の子は目を通していた紙から視線を上げる。ふんわりとしした前髪が丸い眼鏡にかかっていて、細長い指で髪を払うと、穏やかな視線を私に向ける。

眼鏡の向こうの目は夜更かしをしているためか心持ち赤く見えて、薄らとくまが見える。出会った当初は驚いたけれど、夜が長くなると小畠くんはこうなる。

「おはようございます、佐伯さん」

「おはよう、早いね」

小畠くんと私と出会ったのは全くの偶然。

私達がこのカフェで出会ったのは一年生の秋頃。今日のように朝食を作る気がなくて、家を出て、このカフェを発見した時から、小畠くんはここに座って、本を読んだり講義の予習をしたりしていた。その頃は二人共別々に朝食を食べていたけど、大学までの道中や大学の中で度々見るようになって、声をかけた。今ではこうして二人で朝食を食べ合う関係になった。それだけの関係が、ずっと続いている。

冬の朝に出会う小畠くんは夏の頃と比べて柔らかい印象を私に与えた。ほっこりしてるね、と小畠くんを見ていた友達の言葉を思い出す。キャラメル色のコートのせいか、ぐるっと巻かれた赤いマフラーのせいか分からない。夏は飲んでいなかったホットなカフェオレのせいかもしれない。

ほっこりしているのは外見だけで、小畠くんは真面目だった。私が知らない世界のことを、小畠くんは楽しげに話す。宇宙と天体が好きで、夜更かしがしがち。神秘的でロマンに満ちた遠い星々の話をしている時の小畠くんは、私よりずっと年下に見える。

講義とかサークルとかバイトとか私と小畠くんは大学が始まってからは、すれ違いが多くなるけど、朝は等しく訪れ、私と小畠くんが唯一自由に、あるいは意識的に顔を合わせられる時間。

私が家で朝食を用意しなかったら、私と小畠くんがここで顔を合わせる機会が増える。そうしたかったけど、小畠くんの朝の邪魔をしたくなかったから、週の半ば、面倒臭さがピークに達した時にだけ来ている。そうやって自分を律している。

私は朝食を食べるついでに小畠くんに会っていると思われたいし、小畠くんと会うためにここに足を運んでいるとは思われたくなかった。あくまでも、自然を装う。

私と初めて会った頃の小畠くんはもうモーニングのトーストだとかゆで卵を食べたり、カフェオレを飲んだりしていたのに、今は私が来るのを待っているように、テーブルの上には何もない。

「佐伯さんも早いですよ」

「そう？　何か頼んだ？」

「僕も来たばかりですから。先にどうぞ」

小畠くんはそう言って、メニューを私へと手渡してくれる。お礼を言って、メニューに目を通す。

いつものようにパンケーキとサラダとアイスティーと小さなプリンを頼む。小畠くんはいつものようにモーニングだけ。トースト半分とゆで卵一つ、カフェオレ。朝はしっかり食べて、甘いもので終わらないとやる気が出ない私と比べて、小畠くんは少食だ。

でも多分小畠くんが少食なのは朝に限った話じゃないんだろうと思う。私と同じくらい、もしかしたら私よりずっと細いかもしれない腕とか無駄な肉が乗っていない頬とか顎とかを見れば、分かる。

「毎回思うけど、足りるの？」

「二限目がありませんから」

小畠くんは穏やかに笑って答えてくれる。木曜日のこの時間にしか会えない小畠くんは、私と比べてすごく真面目に見える。私だったら絶対サボっていると思う。けど、小畠くんは

この時間にはこのカフェでモーニングを食べている。
冬の長い夜の延長としてある朝を楽しんでいるように。オールをしてハイになっているのかもしれない。
「一限サボりたくないの？」
「別にサボろうと思ったらサボれますけど、一回サボったらもう駄目だと思うんですよ」
出欠を取られない講義を一限目に入れている小畠くんは、多分サボろうと思えば全然できると思う。それなのに律儀に毎週出席している。私は時々サボってたけど、小畠くんと出会ってからはちゃんと出席するようになった。
「駄目って何が？」
「次もサボれちゃうじゃないですか」
木曜日に朝食を作らなかった時に私に襲いかかった罪悪感を、小畠くんも感じているような気がした。
朝食を作るって一言でまとめても、食材を選んで買って、準備をして、作って、洗い物も

して後片付けもして……そういう全てから解放された朝は、清々しい。少なくとも、木曜日の朝に起きて、作らないと決めた時はそうだった。でも清々しさは、作らない理由を作った、物事を継続しなくていい理由を作った罪悪感に囚われ、飲み込まれ、自己嫌悪に陥った。

小畠くんには、私が木曜日に朝食を作る気力が底をつくを話した覚えがある。そうしたら、ここに足を運ぶのが自然な動機なように思えたから。

素直な言葉が、私の口から零れ落ちた。嫉妬も何もない素直な尊敬な気持ち。

「真面目なんだね、凄い」

小畠くんは否定する時も、少し笑う。恥ずかしそうに。

「真面目じゃありませんよ。真面目でしたら、きっと二限目も何か講義を入れてると思います。それに、もっと早く寝るでしょう」

小畠くんは欠伸を零して、目の端に浮かんだ涙を拭う。

「それでも偉いよ」

そういう褒められ方を、小畠くんは今までされてこなったのか目を丸くする。

「そうですか？」

「うん、私は偉いと思う。自分を甘やかさず、ちゃんとやってて」

理系の小畠くんは講義がない時間は大体図書館で自習している、と前に教えてもらった。文系で講義のない時間は適当に時間を潰している私とは大違いだ。

二人分の朝食が運ばれてきて、手を付けようとした時、小畠くんが呟く。

「佐伯さんも偉いと僕は思います」

思ってもなかった言葉に、ナイフとフォークで小さく切り分けていたパンケーキを口に運ぶことなく、私は視線を上げる。

「……そう？」

小畠くんのように笑って否定することはできなかった。自分が思っているより、硬い声。今の私は、小畠くんのように偉くないし、自分を律しているとは思えない。自分の欲望や願いに正直で、でも気づかれないようにしているだけだ。臆病で卑怯と言われても仕方ない。春休みになれば、こうして木曜日の朝に小畠くんと出会える時間がなくなる。そうなる前に、

今までとは違う変化を欲している。

でも、そういうふうに変わることを恐れている自分がいる。変化というか、友達以上恋人未満の今から変わる何かを、求めている。

「佐伯さんは自分の機嫌の取り方、知ってるじゃないですか。だから、偉いと僕は思います」

今度は私が目を丸くする番だった。

「機嫌の取り方？」

「木曜日の朝だけ、ご飯を作れない。でも焦ったり慌てたりすることなく、そのことを受け入れて、ここで朝食を食べている。僕だったら、そんなふうに割り切るのは時間がかかると思います。だから、偉いと僕は思います」

私は私だけの力で、木曜日の朝食を作るのを諦めて受け入れたわけじゃない。そういうことを説明した方が良かったかもしれないし、私の機嫌が良い理由の全てを担っている人のことを話しても良かったのかもしれない。小畠くんの考えは違うよ、と言っても良かったのかもしれない。

でも私はそういう全てを説明しなかった。小畠くんがそうしたように恥ずかしそうに笑う。

「……変わってるね」

そういう全てを説明しなかったのは、きっと今がまだ朝早いせいだ。そういうことにしたいけど、私に告白する勇気がないだけなのでは分かっている。小畠くんも、朝からそんな話を聞かされても、きっとどうすればいいか分からないだろう。私達には、一限目に講義がある。私達は大学生で、勉強をしないといけない。勉強をしないといけないように、恋愛もしないといけない。と、思う。

でも、小畠くんの目に、私はそういう対象として映っているだろうか。確認すれば、教えてくれるだろうか。分からないけど、小畠くんはそういう恋愛事情とは無縁のところにいそうだった。勉強に真面目な大学生。

そこが良いと思うのは、きっともう私が彼と出会ってから、友達以上の関係になりたいと思っているからだろう。

※

こんなふうに、私達は毎週木曜日の朝を一緒に過ごしている。

連絡先を交換したり、大学内で話すことがあっても、私達は素っ気なかった。図書館で会った時なんかは無言だ。毎週朝に会っているのに、話しているのに、そういうことを微塵も感じさせないようにした。不思議なことだけど。

別に私がそういうふうに、私が小畠くんのことを気にかけていることを周りに悟られないようにしていたわけじゃない。気になる人がいるとは言ったけど、名前は出してない。態度にも。そうした方が、小畠くんの大学での生活を邪魔しないと思う。多分だけれど。

だけど私達は真夜中に二人でどこかへ出かける用事を話し合うこともなければ、そんな約束を口にすることもなかった。

それで良かったのかどうかは、分からない。私としては良かったのだと思う。木曜日の朝

のように大学に通う延長線上で小畠くんと会うのなら良かったけど、他だとどうしていいのか分からない。

分からないのは違う。分かる。分かるから困る。小畠くんと会うためにどこかで会うわけで、それはつまり何かしらの好意を持っていなければ起きないこと。どちらかが好意を持っていることを伝えるには十分なことだ。

それは、困る。困るという表現はおかしいかもしれないけど、困るがぴったりのように思える。私の心の準備はまだ全然整ってない。

私と小畠くんは今の関係が心地良かった。少なくとも、私はそう思っている。そう思いたいのかもしれない。自分の今までの生活を振り返って、ここまで男の子と一緒なのは、初めてだったから。小畠くんはそうなのか分からないけど……。

でも大学が中高一貫の六年間より短い四年間で終わることを考えると、このままの関係を維持したまま春休みを迎えて、三年になって、就活や卒論で忙しくなって、卒業することは有り得てしまいそうだった。

というより、一人で過ごす春休みは、もう楽しくない。折角大学生になったのに、一人で長い休みを過ごすのは、楽しくない。

私の当初の予定にはなかった可能性。

私か相手が告白して付き合えると思っていた。告白に、友達以上の関係になるのに、こんなに勇気が必要だなんて思いもしなかった。小畠くんから告白してくれたら話は全て良い方向に進むのにと都合良く思うけど、小畠くんはそんなことは言わないだろう、と勝手に思う自分もいる。

別にこれは小畠くんのことを勇気がないいくじなしと思っているわけじゃない。むしろ、逆だと思う。あるいはもっと別。今までの私の世界にいなかった彼。憧れや偶像をそのままにしておきたいと思うのは、どうしてだろうか。

恋を始めるには、私から動くしかなかった。

告白の仕方は誰も教えてくれない。そんな講義はないし、恋愛を扱った文学作品にも載ってない。カフェに置いてある本にも辞書にも見当たらない。告白は昔の小説家でも難しいら

しい。あの夏目漱石も、我、君を愛すという英文を翻訳するのに、月が綺麗ですね、という言葉を使ったぐらいだ。

私も夏目漱石に倣って、月が綺麗ですねって告白したかった。でもそれはいけないと理性がブレーキをかける。小畠くんが興味がある分野に土足で踏み入っているようで、いけない。

冬の空が澄んでいること、星が綺麗なこと……そういう冬の夜空の美しさを教えてくれた小畠くんに、月が綺麗ですねって言っても、私の本当の気持ちは伝わらない。

別の言葉で、小畠くんが好きなことを伝えないといけない。

私が悩んでいようが、月日は変わらず流れ、木曜日は等しく訪れる。冬は夏より夜が長くて良かった。

まだ少しだけ明るい青空に、沈んでいく白い月が見える。夜空に浮かんでいる時には違う、淡い月だった。東に見える強烈な陽の光に溶けていくような。

いつものカフェのいつもの席に小畠くんの姿があった。コートもマフラーも椅子の背中にかけて、私には分からない世界の本を読んでいる。

「おはよう、いつも早いね」
声をかければ顔を上げ、小畠くんはふわりと笑う。
「おはようございます、佐伯さん。夜が長くなったお陰ですよ」
「月が綺麗だから？」
席に腰かけながら笑って言うと、小畠くんも笑って言う。
「月以外も綺麗に見えるのが良いんですよ」
当然といった調子。夏目漱石が生み出した渾身の告白は、小畠くんには全然自然な現象として受け取られた。
一瞬期待したけど、そう受け取るだろうと分かっていたから気にならない。ちょっとショックだけど……。
「今朝も綺麗だったね」
「昨夜も綺麗でした」
星座のこと、星のこと、天体のこと、遠い遠い世界のことが分かるらしい物理学のこと、

昔にされた難しい研究のこと。小畠くんはそういう話をしている時、本当に楽しそうだ。表情は普段と変わらないけど、発せられる言葉が温かくて、柔らかい。

夜の話を聞きながら、朝食を頼む。二人分の朝食はすぐに届いた。

朝食を食べ終えたら、私達はここを出て、大学に向かう。

大学で会うことは全然有り得ることだし、連絡を入れれば簡単に再会できるけど、その時の私達は今ほど親しいように見せないだろう。私には私のグループがあり、小畠くんには小畠くんのグループがある。そういう関係をおかしくさせないために、私達は意識的に振る舞う。互いが互いのことを校内で見たことがある知り合いというふうに装うだろう。

だからこうして話すのは来週の木曜日になる。週に一度、朝に出会えると分かっているのだから、告白はいつかのその日で良いのかもしれない。来週が再来週になり、一ヶ月後になり、二ヶ月後になるのは十分に考えられた。永遠に来ないその日を待ち続ける。今日をその日にできるかもしれないのに。

でも私は真正面から、小畠くんに好きです、と告白できる勇気はない。言ってしまえば今

日はもう講義どころではない。別の言葉で、でも私が小畠くんのことを思っていると小畠くんに伝わる言葉が必要だった。

朝食を食べる手を止め、小畠くんに声をかける。何気ない会話だと思われるように、素っ気なく。逆効果かもしれないけど、そういう意識をしない会話の方が、私が良かった。緊張して爆発しそうな胸の内を隠せるような気がしたから。

「小畠くん、ちょっと訊きたいことあるんだけどいい？」

「……なんでしょうか？」

訊き方が良くなかったのか、小畠くんはカフェオレを入ったカップを持ったまま、珍しく不安そうな声を上げる。私はその不安を和らげようと試みる。

「今日、空いてる？」

「今日、ですか？」

「うん、今日」

そっとカップを置き、小畠くんは少し考えるように眼鏡の縁に指を添える。

「空いてます」
「そっか、良かった」
何が良かったのかは、私にも分からない。私に分かったことといえば、私はこの時になっても告白を後回しにしたということだけ。しんとした沈黙を、私はもう一つの確認をするために破る。
「もう一つ、訊いていい？」
「なんでしょうか？」
小畠くんの声に、先ほどのような硬さはない。私は時間を確認して、訊く。まだ全然一限には間に合う時間。
「これから、暇？」
「……これから？」
私は用事はいつでも良かった。というか用事らしい用事じゃない。私の用事は、今この瞬間でも達成できるもので、今日のこれからじゃないと達成できないものじゃない。

私と小畠くんは一限の講義に出席する予定で

「少し出掛けない？」

どこへ？ とかどうしてとか、そういう疑問よりも真っ先に小畠くんの口から零れたのは、

「これからというのは、いつのことなのでしょうか？」

という確認だった。

私達は大学生で、互いにこれから講義のある身だ。サボろうと思えばサボれる講義ではあるけど、それはあまり良くはない。

私は簡潔に答える。色々なことが渦巻く胸の内を晒さないように、意図的に。

「朝ご飯を食べたら」

「講義がありますよ」

「だから、それまで。駄目？」

「構いませんが……」

煮え切らない小畠くんの返答に、私はいよいよ意を決して伝えることにした。私らしい言

葉で。私は洒落た言葉で愛を告白できる人間じゃなかった。
「デートしようよ、小畠くん。好きだよ」
小畠くんの顔が一瞬遅れて真っ赤になった。私は続けて、言う。
「小畠くんはさ、その、知ってる？　夏目漱石が、訳した言葉……。月が綺麗なんだって」
小畠くんの返事は短かった。
「知ってます」
「小畠くんは、どう思う？」
「……どう？」
私は答えず、小畠くんをじっと見る。私の、どう？　が何に対しての質問なのか確かめるような瞳。月が綺麗なのは、私も小畠くんも知っている。見たことがある。でも、今、月が綺麗だということだけを問われているわけではないと、分かっているようだった。
永遠に続くと思っていた沈黙は、小畠くんの短い言葉で破られた。
「僕で良ければ……」〈了〉

後書き

この度は、本書をお手に取っていただき、まことにありがとうございます。

「月の明るい夜に」を書き上げた時は、こうして一冊の短編集にまとめあげる気はなかったのですが、「来年の思い出」を書いている時や「63円の縁」の構想を練っている時に、これは、あるコンセプトで一冊の短編集にすることが可能なのではないか、と思うようになりました。

大学生の男女の恋愛、夜、夏目漱石の月が綺麗ですねという通説。

この三つを用いることで、短編集となるのではないか、と。

こうして出来上がったのが、本書です。

以下、短編を書き上げた所感です。技術的な反省が目立つと思われますが、付き合っていただけると幸いです。

・月の明るい夜に

普段書いている短編とは違う感じで何か書こう、と思い立って生まれたのが本作です。何をどう変えればいいのかと思いましたが、完全な三人称視点で一本の短編を書いてみようと思いました。読者は登場人物二人のことが分かっているけれど、登場人物同士は分かっていないという面白さを神視点で描いてみようと考えました。

書いていて楽しい作品ではありましたが、神視点で書きますと、時間軸の流れ、視点の飛び方が急になる、というものがあり、そこらへんのコントロールが非常に難しく感じました。

・来年の思い出

これも書いていて楽しい作品の一つでしたが、短編集に収録するにあたり、技術的な反省が目立つ作品のように思われます。誰かを気にかける、ということを言葉（二人の会話）以外で表現するのも面白いのかもしれない、という意識が作品を書いている時にありました。宮下が一井を気にかけるのに会話だけではなく、目を配る、一井の細かい動きに気づく、という手法を採用したかったのですが、安全運転を心がける宮下には、難しいことでした。か

といって、大きく露骨に場面を変えるのは、どうなのか……と思い、そのまま書き進めました。

・63円の縁

この作品に限らず、自作を読み返すことはあるのですが、作者としてこの作品を気に入っている部分はあります。物語としての分かりやすさがあり、登場人物に感情移入しやすかったり……。書いていて楽しい作品でしたが、どこに夏目漱石の月が綺麗ですね、を差し込むか悩んだ作品です。もしかすれば、全作品に共通している部分かもしれませんね。

大学生の男女が恋愛感情を向けていることを自覚し、自分の言葉で伝える場面ですので、物語の中でどういうふうに差し込むのは悩むのは当然なのかもしれません。

・冬と春（「スイーツを食べるタイミング」より改題）

この作品に関しては、他の作品に比べて技術的な反省が目立ちます。この作品を良いと言ってくださった方はおられるのですが、作者は一つも納得も理解もできないほどに反省が

多いです。物語の展開のさせ方とか主人公が主人公していないところとか登場人物の関係とか……。改稿しましたが、まぁ何とかなったか……？と疑問符がつきます。

一冊の短編集として紙媒体にするのに時間を要した最大の原因といっても過言ではありません。技術的な反省が非常に目立つ本作ですが、お陰で自身が書く作品の癖というか、反省が多い作品を書いた時の基準を得たり、今後、作品を書く時に意識すること等々多くの収穫を得た作品でもあります。

短編がまとまれば、また紙媒体にする予定ですので、その時はまたお手に取っていただければ幸いです。

二〇二四年一月下旬　近藤貴弥

「I love you」の訳(やく)し方(かた)

2024 年 2 月 10 日　初版

印刷　ちょ古っ都製本工房

発行者　近藤貴弥(こんどうたかや)（出藍文庫(しゅつらんぶんこ)）
連絡先：stkk7.920521@gmail.com
個人サイト：https://strn2014.com/

ロゴデザイン　工藤雅弘

この小説はフィクションです。
実在の人物や団体等と関係ありません。

※本書の無断転載・複製・販売等を禁じます。